

あんばさま

茨城県稲敷市阿波いなしきし あばにある大杉神社おおすぎは、古くから「あんばさま」の呼び名で親しまれています。そこにまつられている神は、疫病えきびょうよけ、家内安全、海上・水上安全の神として各地に広がっていきました。

栃木県内においても、「あんばさま」は、大切な人の健康けんこうや安全を願う、とても身近な信仰といえます。

〈鹿沼市の「板荷のアンバ様」の例〉

板荷のアンバ様は、毎年3月第1土・日曜日に、大杉神社をかたどったおみこしをかついで地域内を回り、健康、家内安全を願う行事です。お神輿みこしは、普段おき納められている日枝神社ひえを出発すると、大杉ばやしにのり、大天狗てんぐ・小天狗・獅子などととも地域内全ての家を巡ります。

途中、厄払いやくばらいをする家では、大天狗・小天狗が「アンバ大杉大明神 悪魔あくま払ってヨイのヨイのヨイ」と大声を出して悪魔を払い、獅子がそれを食べるという儀式ぎしきを行います。

150年以上続く、板荷に春の訪れを告げる伝統的な行事です。



悪魔払いをする獅子

(平成6年 柏村祐司氏撮影 県立博物館提供)

〈大杉神社と「あんばさま」〉

昔、阿波あばのあたりで、伝染病でんせんが流行し、たくさんの方が苦しんでいました。そこを通りかかった旅のお坊さんぼうさん（勝道上人しょうどうじんのう）が、「あんばさま」の宿しゆく大きな杉まきに願ったところ、奈良県ならけんの三輪山みわやまから神々（三神）が助けにやってきて、人々を病気から救いました。

それから阿波に、あんばさまと三神がまつられるようになり、それが大杉神社の始まりといわれています。

日光開山の祖である勝道しょうどう上人が、奈良県ならけんの三輪山みわやまから、栃木県とちぎけんの日光にっこうをめざす旅をしていた時のお話です。

「あんばさま」は、ご神木である大きな杉まきに宿しゆくしているとされることから「大杉大明神」とも呼ばれます。